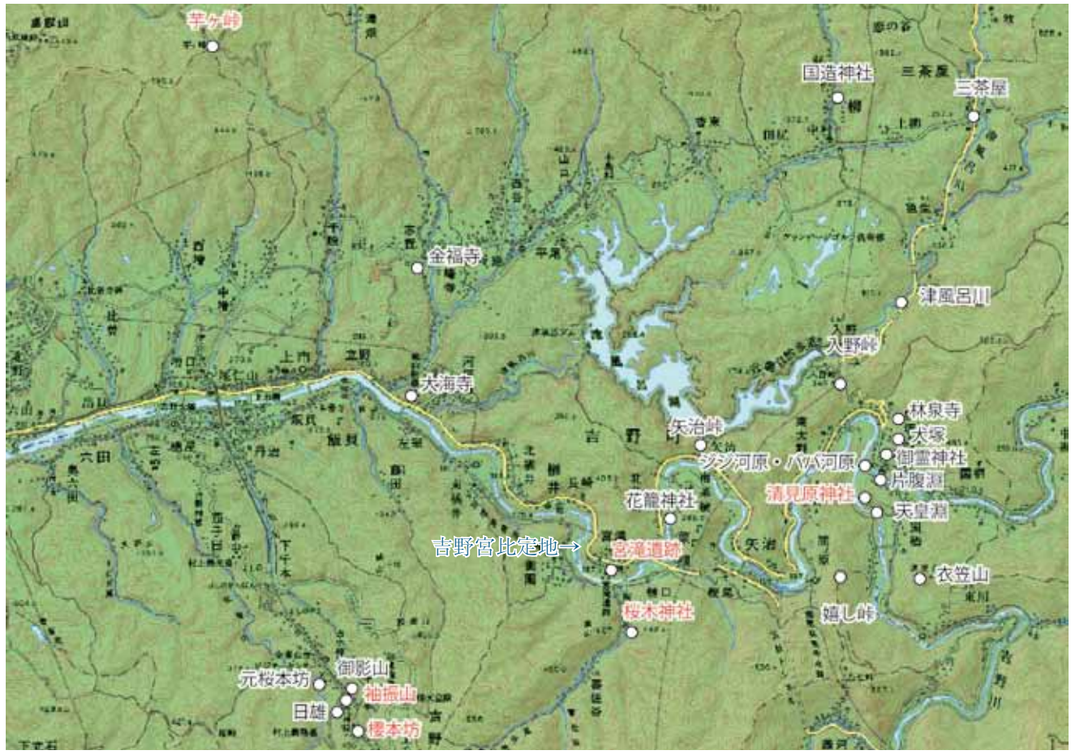

【第２期（11 月 27 日頃まで）展示品一覧】　※第１期より、着色している資料の展示を変更してます。

	展示品名	成立年など	所蔵
奈良時代	古事記	和銅５（712）年	個人蔵
	日本書紀	養老４（720）年	宮坂文庫
	藤氏家伝	天平宝字４（760）年	個人蔵
	懐風藻	天平勝宝３（751-752）年	宮坂文庫
	万葉集	奈良時代末	資料館蔵
平安時代	薬師寺縁起	長和４（1015）年	個人蔵
	竹取物語	平安時代前期	宮坂文庫
	日本紀略	平安時代後期	宮坂文庫
	簾中抄	平安時代末か	個人蔵
鎌倉時代	宇治拾遺物語	鎌倉時代前期か	個人蔵
	平家物語	鎌倉時代	宮坂文庫
	愚管抄	承久１（1219）年	宮坂文庫
	水鏡	鎌倉時代初期	宮坂文庫
	源平盛衰記	鎌倉中・末期か	宮坂文庫
室町時代	太平記	室町時代	宮坂文庫
	吉野拾遺	室町時代	宮坂文庫
	神皇正統記	南北朝時代	宮坂文庫
	二人静	成立年未詳	宮坂文庫
江戸時代	大和名所図会　巻６	寛政３（1791）年	資料館蔵
	袖振山（未刊謡曲集）	江戸時代か	個人蔵
	御影山（未刊謡曲集）	江戸時代か	個人蔵
	春雨物語	文化５（1808）年	資料館蔵
	長等の風	江戸時代後期	個人蔵
	大日本史	江戸～明治時代	宮坂文庫
	役行者大峯桜	江戸時代中期	個人蔵
近世	総合日本史概説	昭和７（1932）年	宮坂文庫
	新訂日本二千六百年史	昭和 15（1940）年	宮坂文庫
町内伝承	皇室と国柄	昭和 15（1940）年	宮坂文庫
	和州吉野旧事記	成立年未詳	宮坂文庫
現代	大塔宮之吉野城	昭和 12（1937）年	資料館蔵
	奈良県吉野町民間説話報告書	平成９（1997）年	資料館蔵
	紙漉き道具・楮（黒皮・白皮）	—	資料館蔵
	３月大歌舞伎	昭和 33（1958）年	個人蔵
	ウォーゲーム 日本史 19	平成 25（2013）年	個人蔵
	DVD 暁の帝　壬申の乱編	平成 30（2018）年	個人蔵

※本陳列は、「壬申の乱」が登場する作品全てを
紹介するものではありません。

	展示品名	作者	発行	刊行年	所蔵
現代・小説	茜さす	永井 路子	読売新聞社	1988	個人蔵
	能楽ものがたり 稚児桜	澤田 瞳子	淡交社	2019	個人蔵
	宇宙皇子１	藤川 桂介	角川書店	1984	個人蔵
	かかみ野の土	赤座 憲久	小峰書店	1988	個人蔵
	蘇我の娘の古事記	周防 柳	角川春樹事務所	2017	個人蔵
	キサキの大仏	奥山 景布子	中央公論新社	2012	個人蔵
	妖の女帝	阿夫利 千恵	叢文社	2002	個人蔵
	大津皇子	生方たつゑ	角川書店	1978	個人蔵
	大津皇子	町田 俊子	幻冬舎 MC	2015	個人蔵
	役小角異聞 また還り見む	若井 万福	三一書房	2003	個人蔵
	美濃路燃ゆ	渡辺 孝	文渓社	1985	個人蔵
	名残の飛鳥	大森 遼	柏艪舎	2008	個人蔵
	新羅花苑	宇田 伸夫	近代文芸社	2001	個人蔵
	大友の皇子東下り	豊田 有恒	講談社	1990	個人蔵
	壬申の乱 星空の帝王	樋口 茂子	PHP 文庫	1996	個人蔵
	皓月３	梅前 佐紀子	幻冬舎	2015	個人蔵
	大友皇子の母	藻 里良子	新人物往来社	1989	個人蔵
	大海人皇子	浜田 けい子	さ・え・ら書房	1983	個人蔵
	呪力戦記　壬申の乱	藤川 桂介	ネスコ	1997	個人蔵
	大海人皇子秘話	真弓 常忠	臨川書店	2011	個人蔵
	天の川の太陽　下	黒岩 重吾	中央公論社	1985	個人蔵
	赤き奔河の如く	倉橋 寛	風媒社	2011	個人蔵
	女人たちの壬申の乱	横関 朝子	中日新聞社	1983	個人蔵
	闇の左大臣	黒岩 重吾	集英社	2006	個人蔵
	日輪の賦	澤田 瞳子	幻冬舎	2013	個人蔵
	恋ふらむ鳥は	澤田 瞳子	毎日新聞出版	2022	資料館蔵
	丹生都比売	梨木 香歩	原生林	1995	個人蔵
	采女の怨霊	高田 崇史	新潮社	2021	個人蔵
	白鳳の嵐	町田 俊子	幻冬舎ルネッサンス	2011	個人蔵
	剣は湖都に燃ゆ	黒岩 重吾	文藝春秋	1993	個人蔵
	キトラ・ボックス	池澤 夏樹	KADOKAWA	2017	個人蔵
現代・慢画	火の鳥　太陽の巻	手塚 治虫	KADOKAWA	1986	個人蔵
	天離る月星	長岡良子	秋田文庫	2003	個人蔵
	天の果て地の限り	大和和紀	講談社	2007	個人蔵
	天上の虹	里中 満智子	講談社	1988	個人蔵
	天つ雷鳴	河村 恵利	秋田書店	2000	個人蔵
	女帝の手記	里中 満智子	読売新聞社	1992	個人蔵
	ふることふひと	風越洞他	マックガーデン	2020	個人蔵

【企画・展示】吉野歴史資料館　　【会期】令和４年４月２日～ 11 月 30 日　　※ご入館は資料館開館日に限ります。

1．2022 年は「壬申の乱」から 1350 周年

時をさかのぼること 1350 年まえ、日本の古代史上で最大の戦乱ともいわれる”壬申の乱”がおこりました。このたたかいは、乙巳の変（大化の改新）以降の時代を、陰に日向にささえてきた天智天皇（中大兄皇子）が亡くなったあと、その後継ぎを巡っておこなわれました。争ったのは、天智天皇の弟・大海人皇子と天智天皇の息子・大友皇子。このうち大海人皇子は、乱がおこるまえの半年間を吉野宮ですごし、吉野宮を出発してたたかいに挑んだのでした。

吉野宮を出発した大海人皇子は、道中で息子の高市皇子らと合流し、不破（関ケ原）をめざします。桑名で夫人の鵜野讃良皇女をのこし、息子の高市皇子を中心に体勢を整え、大友皇子のいる大津宮へと攻めこんだのでした。

同じとき、いまの奈良県内では大伴吹負ひきいる別働隊（大海人派）がたたかいをくり広げていました。そして、大伴吹負の動きを大海人皇子に報告したのが大伴安麻呂。令和で一躍有名となった、あの大伴旅人のお父さんだったのです。壬申の乱で安麻呂が活躍しなければ旅人の出世もなく、「令和」の言葉はうまれなかったかもしれませんね。

2．「壬申の乱」を人々はかく語りき

「壬申の乱」のおもしろいところの一つに、たたかいが終わった後もさまざまな文学作品で語り継がれたことが挙げられます。しかも、語り継がれるたびに、その時代時代の思いや解釈がくわえられ、まるで伝言ゲームのように、少しづつ話の内容がかわっていくのです。

本陳列では、1350 年にわたる「壬申の乱」伝言ゲームの様子を、本と町内にのこる伝承を通してご紹介します。

壬申の乱・大海人皇子の進軍ルート（左・吉野から不破へ　右・不破から大津宮へ）　※赤字は主な戦場

それぞれの時代、人々は「壬申の乱」をかく語りき

西暦672年、壬申の乱がおこる。

飛鳥時代

『古事記』序文　（歴史書）
壬申の乱は、大海人自らが天皇となるべく、時期をまって吉野で準備をし、大友皇子らを討伐した戦いだったと記す。

『日本書紀』天武天皇の条　（歴史書）
部下から「大友が人夫を集め、戦の準備をしている」などと聞いたため、大海人皇子は戦いを決意したと記す。

『懐風藻』大友皇子の条　（漢詩集）
大友は、知識も文才も素晴らしかったのに、壬申の年に乱にあい、天寿を全うできなかったと記す。

奈良時代

『藤氏家伝』（伝記）
壬申の乱について、藤原鎌足が生きていれば、このようなことにはならなかったのにと、皆残念がったものだ、と記す。

『万葉集』（和歌集）
荒廃した大津宮を詠んだ歌、亡き高市皇子の活躍を称えた歌、吉野に向かう時を想起した天武天皇の歌などが載る。

『続日本書記』聖武天皇の条　（歴史書）
「五節の舞」について、大海人が吉野で琴を弾いていた時、天女の舞を見たことが由来と紹介する。

様々な立場の見解が記される

平安時代

『薬師寺縁起』（縁起）
本願大海人の業績を記す。大友が大海人をねたみ、反逆を計画した。そのため大海人は伊勢国で兵を集めた、と記す。

『日本紀略』（歴史書）
部下から「大友が人夫を集め、戦の準備をしている」などと聞いたため、大海人皇子は戦いを決意したと記す。

『簾中抄』（故実書）
大海人は春宮であり続けるのは本位でないと吉野に出家した。後に、大友が吉野を襲おうとしていると聞き、決起した。

参考）『竹取物語』
かぐや姫に求婚する貴族たちの名前が、壬申の乱ゆかりの人物になっている。

大友皇子悪者説が出始める

鎌倉時代

『宇治拾遺物語』（説話物語）
大友は常々、次期天皇を狙っていた。吉野の大海人を襲おうと軍を整えたが、大友の妻が大海人に密告し、叶わなかった。

『平家物語』・『源平盛衰記』（軍記物語）
以仁王の挙兵を大海人に例える。大友に襲われた大海人は少人数で挙兵し、天下泰平を成し遂げたと、決起を鼓舞する。

『愚管抄』（史論書）
大海人は天智から譲位されたが、即位する気はなかった。大友に襲われそうなことを知り、戦いを決意した、と記す。

『水鏡』（歴史物語）
天智没後、即位した大友。なお大海人を疑い、吉野宮を襲おうとした。大海人は吉野を逃れ、尾張美濃の兵と共に戦った。

大友皇子の悪者扱いが定着する

南北朝時代・室町時代

『太平記』（軍記物語）
後醍醐天皇を迎え入れるべきか、吉野山の宗徒が検討した時、大海人皇子の先例をもとに判断がなされている。

『吉野拾遺』（説話集）
豊明の節会のあと、後醍醐天皇は京都の宮中との違いを歎き、大海人が天女をみたという袖振山を見て歌を詠んだ。

『神皇正統記』（歴史書）
大海人は太子の位を大友に譲って吉野に入った。しかし、大友はなお危惧し、吉野を襲おうと計画した。

『二人静』（謡曲）
静御前の亡霊の回想シーンで、「昔浄見原の天皇、大友の皇子に襲はれて、かの山に踏み迷ひ…」と出てくる。

南朝、大海人にあやかり吉野へ。

大海人皇子が幼児化する。

江戸時代

『大和名所図会』（地誌）
吉野山の名所「袖振山」を天女がここで舞ったのが名前の由来と紹介し、参考に大海人が琴を弾いた記事を紹介する。

『袖振山』（謡曲）
吉野山に花見に来た人が、里人に案内を頼む。大海人所縁の袖振山の話を聞いた夜、琴を弾くと、天女が舞うのを見る。

『御影山』（謡曲）
筑紫から吉野山を訪れた僧が、御影山の由来について、清見原が天女の舞を見た時、その影が映ったからだと教わる。

『春雨物語』（小説）
大海人が吉野に逃れた時、天女が五人舞い降りて舞ったのが由来なので、五節舞は五人の女性で行うのが古式だと解説。

大海人ゆかりの地が観光地化。

大友悪者説がまだまだ一般的。

大友皇子の評価の見直し始まる。

『長等の風』（史論）
大友が悪役とする評価を疑問視し、天智天皇崩御から天武天皇即位までの間、大友皇子が即位していたはずだと主張。

『大日本史』（歴史書）
大友について、『懐風藻』や『水鏡』の文章を検討し、即位して弘文天皇となっていたと見るべきだとした。

『役行者大峯桜』（戯曲）
大海人と大友（先帝が官女に生ませて行方不明となっていた）・そして大友を擁護する蘇我赤兄の争いを描く作品。

『和州吉野旧事記』（由緒書）
大海人が位を譲って吉野に逃れた時、大友が吉野宮を襲った。国栖人が大海人を和田山の洞くつに匿ったと記す。

明治以降

『総合日本史概説』（解説書）
大友は大海人の謀反に備えていたが、大海人は身の危機を感じて挙兵した。大友は即位していたというが、異論も多い。

『新訂 日本二千六百年史』（解説書）
壬申の乱は、急激なる改革に不満をもった保守貴族の手によって起こされたものであったと解説する。

吉野町内のお寺の縁起や言い伝え
『日雄寺継統記』や『金福寺縁起』、吉野町内各地の伝承で、大海人にまつわる話が残されている。※日雄寺は現存せず。

大友皇子即位説が定説化する。

壬申の乱は皇族の争いではない！

戦後、戦前史観の見直しへ…。

※吉野町内の伝承については、『吉野町内の古代ゆかりの場所』リーフレットもご覧ください。